技術協力-中国吉林への旅(2)

誌名	農業技術
ISSN	03888479
著者	清沢, 茂久
巻/号	43巻5号
掲載ページ	p. 227-230
発行年月	1988年5月

農林水産省 農林水産技術会議事務局筑波産学連携支援センター
Tsukuba Business-Academia Cooperation Support Center, Agriculture, Forestry and Fisheries Research Council Secretariat

技術協力——中国吉林への旅(2)

清沢茂久

会場の設営

講演会が始まった。その初めから恐れていたことが起こった。会場に暗幕が張ってない。いや幕が張れそうな会場ではない。このことを心配して予めスライドが使えるかどうか手紙で連絡を取った。そして，使えるという返事を貰った。しかし使えそうにない。結局，スライドは会場を10人位しか入らない小さな部屋に移して続けた。スライドがようやく使えるようになったのは3日目であった。この前昆明でも同じことが起こった。その時は国際電話や手紙で再三にわたって問い合わせ，使えるという返事を貰っている。それにもかかわらず，会場に暗幕が張ってないのだ。300人も入ろうかという大きな会場にだ。暗幕がなければスライドは出来ない。予め連絡してスライドで良いというので全部資料はスライドにして来た。何とかして欲しいと何回か頼んでみたが，結局前の4つの窓に毛布を張ってくれただけだ。これではとても写らない。念のため写してみたが殆ど見えない。止むを得ずスライドは全部夜やることにした。どうせ私は夜やることがないのだから望むところとばかり，昼夜兼行の講義と相成った。これで一番困るのは講義の順序を全面的に変えなければならないことだ。中国ではお昼に2時間の休みがある。その間昆明では確か自動車で20分くらいかかったが，その度にホテルに帰って食事をして寝ることになっていた。しかし，スライドの順序を変えなければならない。ゆっくりはしていられない。

今度もそうだ。この前に懲りているから今度はしっかり連絡を取ったつもりだが，やはり昆明と同じことが起こった。今度（吉林）はお昼の休憩は研究所内であったため，多少の時間の余裕はあったが，それでもゆっくり休むほどの時間はない。しかも同じことが吉林滞在中に2回も起こった。1つは中国全土からいもち病の専門家が集まって行なった講演会だ。係が違うとはいえ，同じ研究所の人が係だ。念のため前もって確認することを忘れなかったつもりだ。そして前の日に会場を1回見せてくれと頼んだ。見に行った。だが500人も入ろうかという会場に暗幕が張ってない。係の人は日本流にいうと，「専門家清沢茂久先生講演会」という横断幕張りにおおわらわだ。そんなものはどうでもよい。暗幕をどうにかしてくれと何回か頼む。残念なことだが，ものを見せつけられなければ，信用できなくなっていく自分がよくわかる。更に念を押して頼んでホテルに向かった。

翌朝，会場ではなく，別の部屋に案内された。「今度は自信がある。見に行く必要がない」という。いや，プロジェクターにスライドを入れる必要があるのだといって見に行こうとしたら，それなら持って来るという。止むを得ず，見に行くのを諦めた。時間が来たので，連れられて行ってみると，窓には一部を除いて，クラフト紙が張ってあった。太陽光線が透き通って見える。これでは駄目だといったら，前の一窓だけクラフト紙を二重に張って，後は動こうともしない。映して見る。多少見えた。それ故，ひとまず余りはっきりとスライドが見えなくても，話が分かるところだけ話すことにした。

午後も，早めに会場に行って見た。ところが全然直してない。様子を見ようとしてプロジェクターの電気を入れて見た。聴講生の座っている席の中央まで行って見た。ところが字が今然見えない。一部は西日に変わったせいだろう。止むを得ずスライド使用は明朝にして，また講演の順序を変更することにした。まだ，中国には会場の設営に馴れない人が多いようだ。宴会の準備にはえらく張り切る人も，会場の設営には，一向に熱が入らない。中国ではスライドを使って講演する習慣がないそうだ。会議の前日に1回は予行演習が必要のように思う。プロジェクター，あの会場で使うには光源が小さ過ぎる。暗幕，スライド係，電気のスイッチ係，マイクの係，全体の進行係などなど，色々必要だ。

中国諸事情

実は，日本を出発する前にも色々あった。朴さんの招待状を受け取ってからこちらの意志を伝えるまでに多少の時間が掛かったとはいえ，所長への依頼状がくるまでに相当の時間が掛かり，こちらの手続きのための時間が少な過ぎた。手紙での連絡では間に合わない。電話を何回か掛けたが今然通じない。3日間，電話のための時間を潰したが，その内2回は相手の電話までは通じたが，遂に相手が電話に出なかった。日本語の話せない人が電話に出る場合を予想して，中国語の出来る人にお願いして，2人で電話機のそばを離れられなくなる。吉林市内

Shigehisa KIYOSAWA: Technical Co-operation Traveling to Jilin, China.（2）農業技術 43（5），1988.

のホテルにいる日本人を通じて研究所まで行って連絡を取って貰わない限り，電話連絡は無理のようだ。この方法で，２回連絡に成功したが，２回とも夜の11時と朝の６時で電話を掛けられる相手にとっては迷惑な時間だ。ちなみに中国は今夏時間にしており，日本と時差がない。この方法もそうたやすくはない。研究所への電話連絡を諦めて，電報連絡に切り換えた。こちらからは電報が届いたが，向こうからは無理だという。

この連絡の遅れが，出発を１日延ばさざるを得ないはめになった。６日(木)の朝は，７日にはビザを出せると言っていた中国大使館が７日になって出せないと変わった。それでは予定の10日(月)には出発できない。そのため，慌てて10日に迎えに出ているはずの吉林市農業科学研究所と北京の農業科学院作物育種栽培研究所の凌さんに電報を打った。彼は，私のところに２年間留学に来ていた人だ。

私の考えでは，当然吉林から，北京に出てきている人に電話で連絡すると思っていた。ところが，後で聞いたところでは，そうではなかった。新たに人を派遣して電報の内容を北京に来ている人に伝えさせていた。しかも，北京の飛行場に迎えに来てくれていた人は合計５人だ。凌さんとその奥さんと吉林の人３人だ。凌さんの奥さんは期待はしていなかったが，理解できる。吉林からの３人にはびっくりした。

後で聞いたところでは，電話より人を派遣した方が確実であるという。初めはこの言葉が理解出来なかった。１週間，２週間と，日を経るに従って色々の事情が飲み込めて来た。

吉林を初めの２人が出発したのがなんと４日か５日だという。人により言うことが違うからいかにも中国らしい。別に他の目的があったからではない。中国では汽車も飛行機も日本のように予約制度などなく，３，４日前から，朝６時頃から並んで買うのだという。そして時には６時間並んでも買えない時がある。その時はまた，朝３時からを繰り返す。そのために３日は予備日を取っておかなければならない。実質２日の出張に５日間の届けを出してくる。と同時に常に２人で出張する。１人が会議に出て，１人が切符を買いに行く。中国のお役人は良く客を連れて遊びに行く。しかし，それは遊びではなく，地方から出て来た人が，汽車の切符を買えるまでの時間潰しのお相手だという。汽車は時間がかかる。吉林から北京まで21時間。役人は飛行機に乗ることを許されない。勿論，自分の金で乗るのなら問題はない。外人と一緒なら許可が出る。かくして３人が迎えに出て，飛行場まで来ることになった。帰りには１人だけ汽車で帰る。外人と一緒の人数は２人が限度なのだろうか，それとも飛行機の切符の１枚の追加が難しいためだろうか。少しずつ事情が分かりかけて来る。それでは観光客が困るのではないかというと，外国人の場合はすぐ買えるという。あくまで外国人を区別する国だ。ホテル，食堂も別々。お金も外国人の使うのは兌換券，中国人が使うのは人民券だ。外国人は何を買っても２倍取られる。その２倍でも日本より物価は安い。

吉林省でも，黒竜江省でも，雲南省でも，育成中のイネの材料を海南島に送って世代促進している。そのために毎年人を派遣するのであるが，吉林から海南島に行くのに片道10日は掛かると言う。10日間夜行列車に揺られて行くのは相当辛いらしく，今は若手の仕事になっているという。ついでだが，種子に胡麻葉枯病菌の着いてくるのを極端に警戒しているようだ。

次は電話だ。中国人はそばで電話がなっていてもなかなか出ない。初め中国大使館でこの現象を見て，中国人の方が合理的だと思った。何故なら，わざわざ大使館まで足を運んで来る人の方が，電話を掛けて簡単に済まそうとする人より大切にするのが道理だ。ところがどうも必ずしもそれだけではないらしい。吉林を去って，北京でNECの出張所を探そうとした。そんなことは出来ないと凌さんは言う。そんなことが有るものかと思い，ホテルの服務員に聞いた。「電話帳有りませんか？」。「有りません」。「電話番号の調べ方を教えて下さい」。「知りません」。良く分からないが，ほんとに無いのか，皆が知らないだけなのか，どちらかだ。少なくとも電話が大衆のものになっていないことだけは確かのようだ。凌さんも，朴さんも電話では駄目だという。両氏の家にも電話はない。電話は階級や必要性により許され，たとえ金があっても許されないのだと。林業大学にNECのコンピューターが有るというので借りようとした。ところが外人は校内に入れられないという。両氏にもその理由は分からないようだ。これも外人区別の一つだ。結局，薛さん（浙江農業大学）に行って貰った。そればかりではない。その学校のコンピューターは他人が使ってはならないという。そのため，専門に使っている人に指示して動かして貰ったが，何故か思うように動かなかったらしく，ただ１日を無駄にしてしまった。

講義とその準備

講義は勿論通訳付きだ。朴さんが全部通訳してくれた。通訳しやすいように文章を短く切って話した。ドイツ語と同じに日本語は一節が長い。切るのも楽ではない。一言話すと朴さんは２言，３言話す。時には10言ぐ

らい話す。時には遺伝子記号など私の話さないことを話している。おそらく解説しているのだろう。頭の切れる人だ。でもあまり長いと，間違ったことを話してはいないかとか，これからこちらが話そうとすることを話しているのではないかとか，それほど話せるのならわざわざ日本から大金を掛けて講師を呼ぶ必要は無かろうにとか，ついつい余分なことを考える余裕ができてしまう。困るのは，余分なことを考えているうちに，私が話そうとしていることを忘れてしまいそうになることだ。長い講義も最後に近づいた頃，遂に恐れていたことが起こった。何を話そうとしていたか忘れてしまったのだ。その頃は朴さんの通訳が更に長くなっていた。仕方がないので通訳を少し短めにするようお願いして，最後に何を話したか聞くはめになった。

私がスライド無しで喋っていた頃，ワイフは単胞子分離のための道具作りや準備に没頭していた。単胞子分離ができる顕微鏡がない。何とか使えそうな顕微鏡は探し出したが，照明がない。また培養基作りのための大型フラスコが無い。油紙もない。ジャガイモを煮るには鍋を使い，寒天を溶かすには300m*l* の３角フラスコ２つを使ったという。フラスコの上にかぶせる紙は油紙の代わりに新聞紙という具合だ。これでよく仕事ができる。これまでは吉林省の農業科学院に検定を依頼しており，こちらでは今年が１年目で，まだ何も揃っていないという。ガラス室も無ければ，接種箱も無い。ニクロム線代わりに有りあわせの針金を使った。ないないづくしだ。

食　　事

中国では食事が合わなくて大変だ。昆明に行った時も初めの１週間は太り，後の１週間ですっかり痩せて帰った。食事は時には口に合わないものがあったとしても，概して旨い。しかし，御飯を除くすべてが油を使っているため，日本で食べるのと同じくらいの量を食べると腹を壊す。昆明の時も途中で腹を壊した。講義中下痢をして，講義場（軍隊の建物）の，扉が中間にしか着いておらず腹の下が丸見えのトイレを使ったり，講義の最中に失礼するのを避けるため，食事を抑えたら，講義中体がふらふらになり，参った経験がある。初めから気を付けようと思うが，中国人はお客に沢山食べさせるのが礼儀だといって，お皿にどんどん取ってくれる。仕方なくこちらも，出されたものを一通りお皿の上に取って，食べない作戦に出た。人によってはこの作戦は利いた。しかし人によっては，全然おかまい無しに取ってくれ，お皿の上に屋上屋を重ねる。初めから私は医者から食事制限を言い渡されていることを告げて，予防線を張ったうえ，その後も何回か普通の食事の量を減らすようお願いしたが，聞かばこそだ。旨いものも沢山出るとまずく見える。まずいものも少ないと旨く見える。この日本人的感覚は理解できないらしい。残った部分は無駄になる。こちらはその分まで金を払っている，と考えるのは日本人の島国根性なのだろうか。一見裕福に見える日本人は心が狭く，一見貧乏そうに見える中国人の方が心が豊かなのだろうか。

遂にワイフが腹を壊してしまった。何回かトイレに行く。そして時々物凄く痛がる。私も経験がある。韓国に行った時，同じような状態になり，１日13回もトイレに行き，往生した。何も食べないのに水が出る。いわゆる脱水症状というやつだろう。その時，その会議に出席した，初めて韓国に行った日本人と台湾の人の全部が同じ症状を訴えた。２回以上来ているか，春から来ている人はなんでもない。多分免疫ができているのだろう。私は日本人としては最後に病気になったが，最も重かったようだ。結局講義の当日医者に行き，講義を１日延ばして貰う結果になってしまった。

ワイフを病院に連れて行って貰う。私もついて行った。専門的に外人を見る診察室はあるが，今日は日曜日なのでやっていないというので，急診室に行った。外観はなかなか立派な病院だ。病院に入る。暗い。汚い。中の長椅子には国民服の重病人(？)がごろごろ寝ている。入っただけで病気になるような雰囲気だ。やがて診察室に入った。若い女医さんだ。１対の机と椅子，少しの書類，それ以外の何もない。これで診察室なのだろうか。やがて白衣のポケットから聴診器を出した。男性の患者のいる中での診察だ。そこから出て少しすると，便を取ってくれといって，２枚の薬包紙のようなものを渡した。これに便が取れるのか。水のような便だといっても取り合わない。少しでよいという。幸か不幸か便は取れなかった。急性胃炎だという。それから注射室に入った。ここにも器具はあまりない。寝台の上に腕をまくって待っているとお尻だという。部屋の中には男性の患者もいる。勿論私を含む付添いもだ。そんなことにおかまいもなく注射をする気らしい。

やがて尻を出して待つと，そこにアルコールで消毒すると，ぶすっと肌面と垂直に反動を着けて針を突き刺した。そして注射器を押しながらぶるぶると針を振った。長い注射だった。１分以上掛かったような気がした。相当痛かったらしい。

たまたま日曜日に急病になったため，中国人専用の病院に行ったのだが，ここに中国の貧しさの象徴を見たような気がする。ここでも外国人と区別している。吉林市

を国際都市に脱皮させるためには，全体をレベルアップして，中国人と外国人の区別をしなくても済むような施策が必要のように思う。

ワイフはホテルに帰って1日は食べずに過した。その後，お粥と油を使わないで野菜を煮てくれと頼んで貰ったが，遂に油を使わないおかずは出なかった。油無しでは料理はできないらしい。うどんにも油が入っている。

私も，中国に来て1週間経たない中に，腹の調子がおかしくなった。下痢こそしないが，腹に熱を持ち，頭が冴えなくて参った。それを避けるために脂っこいものを食べるのを極力避けた。結局安心して食べられるものはご飯しかない。体は段々痩せて行く。

それでも何とか食べ物の量の調節がつけられるようになってきたと思っていたら，25日になって遂に下痢をしてしまった。昨日のご馳走のせいだ。ご馳走毎に腹の調子が悪くなる。講義の最中にトイレに行くのは避けられたが，これ以上悪くなるのを避けなければならぬ。朝飯は抜いた。お昼も抜こうと思っていた。ところがお昼を誘いに来た。下痢の旨を話したが，それでも来いという。止むなくついて行ったが，相変わらずどっさりとご馳走が並べられている。それを前にして，結局食べずに帰った。今夜と明日，それぞれ所長と市長主催の送別会があるという。これではとても宴会どころではないので，こちらの事情をお話して，折角のご馳走を食べないでいるのも失礼ですからと，お断りした。そして挨拶だけで許してもらった。ともに快く承知して下さった。無理に礼儀を押し付けるより，この方が好意の心のように私には思えてならない。お二人には本当に感謝している。そしてこちらの無礼を心からお詫びしたい。おそらく中国人が日本に来ても似たような苦労をするのだろう。気を付けなければならない。

沿　　道

同じ道を毎日通って気が付いた。家の周りに花がない。研究所の前にこそカンナ，ヒャクニチソウ，マツバボタン，それにマツヨイグサまでが植っているが，町中の家のまわりに花らしい花が見られない。但し多くみられる塀のある家の塀の中まで見たわけではない。朴さんに言わせれば，野菜が高いので家の周りにも野菜を作るのだという。要するに余裕がないのだろう。ついでだが，同じ理由で都市周辺では野菜を作り，イネを作ってはいけないと指導されているとのことで，都市近辺にはイネは見られない。

商店街では様子は違う。市の指導で美化に努めているらしく，至るところに鉢に植えた花が雛段のように並べられていた。町に仮設された私立の売店も美化を考えて，一定の基準のなかでのみ許されているという。

そう言えば，時季のせいか，花が少ない。現在咲いている花で最も多く見られるのは，オオイヌタデの花である。日本にはわずかしかないこの花が，至るところに咲いている。ときどき日本には多いイヌタデも見られるが，日本のイヌタデより少し大きい気がする。その他に花といえば，家の周りのヒマワリ，カボチャ，雑草のヒルガオ，半ば雑草化したコスモス，時々アサガオも見られたが，日本のような大輪のものはない。その他，私が名前を知らない花が二，三見られるだけだ。もっとも今を盛りと咲いているイネ，コウリャンのような隠れた花は除いての話だ。そのイネ，コウリャンも研究所を除いて余り見られない。畑も割に少ない。

北京もそうだが，吉林も実に人が多い。長春は200万都市，吉林は100万都市だそうだ。町中に人が溢れ，あちこちで大ビル，小家屋を建てており，まさに建築ラッシュだ。人口増加のためのラッシュか，建て替えのためのラッシュか聞いてみた。両方だが後者が多いという。都市の人口増加を防ぐため，中国では農家の都市への移転を禁じている。その農家の方が建築中の家が多く富んでいるというのだから，この条例は暫くの間は余り問題にならないのかも知れない。そう言えば，市街地の方が壊れかけたレンガの平屋の家が多い。市の中心地にさえ点々とみられ，市街地から少し外れると平屋の連続だ。政府と多くの会社には住宅が準備されているが，中国で国に対して貢献した年寄り労働者とか役人が住んでいる。若い夫婦や役人達は好んで自分で家を建てて，そこに住んでいるという。国や会社の許可を得れば，自由に家は建てられるそうだ。勿論，土地代など要らない。

あちこちの建築ラッシュのせいか，道には泥が多い。天気ともなると，その泥が自動車に巻き上げられて，土ぼこりが上がり，町が霞んで見えるようになる。目の中が少しざらざらする。昆明のように至るところにタンが吐き捨ててある汚さはないが，余り綺麗とは言えない。もっとも昆明でタンが出るのは気候のせいのようだ。我々も昆明ではタンが絡んで困った。しかし，日本のように道に空缶が投げ捨ててあるようなことはない。もっともまだ缶入りジュースなどは普及してはいないのかも知れない。食堂では殆ど瓶入りだった。その瓶の捨てたのも殆ど気にならなかった。せめてこの点日本の真似はしないようにして貰いたいものである。吉林も5年後には様変りするという。そう期待したい。先進国のいいところを取り入れ，自国の悪いところは捨ててだ。

（農業生物資源研究所細胞育種部主任研究官）